

学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしかひらかない



八 戸 市 立 小中野中学校

平成29年2月2日(木)

No.73

文責：校長
工藤 聡

私の友達シリーズその③「みのる」

5月4日発行のNo.40と11月14日発行のNo.64に続く「私の友達シリーズ」の3回目です。

私が市内のS中に勤務していた時の話です。私より3つほど年上で、同じ津軽出身の体育の先生がいたのですが、その人がある日、「工藤先生、ひょっとすると私の弟を知ってるんじゃないですか」と聞いてきました。私が「弟さんの名前、何というんですか」と聞き返すと、『みのる』だということでした。みのる…ミノル…MINORU…。なかなか思い出せません。なにせその当時で16年ほど前のことです。「“みのる”って、どういう字を書くんですか」と再び聞くと、「稔」という答え。そこで思わず「アッ」と声がでました。“○藤稔”といえば、高校1年生の時、同じクラスだった友達です。高校卒業と同時に、ほとんど会う機会はなくなったのですが、高校の時は、何をやるにしても一緒にしました。

“みのる”は、かつて少年チャンピオンに連載されていた水島新司のマンガ『ドカベン』や『大甲子園』に出てくる“秘打男の殿馬(とま)”(みなさんはわからないと思いますが、野球好きのお父さんなら知ってるかも…)に非常に似た雰囲気を持ち主でした。マンガに出てくる殿馬という人物は、見た目はさえない小さな男ながら、ピアノは一流の腕前であり、野球でもみんなをあっと言わせる何かをやってくれるという設定なのですが、“みのる”もソックリでした。いつもは目立たないのですが、いったん何かをやりますと、いつのまにかその中心にいたり、あるいは“みのる”がいないと何をやるにしてもおもしろくないといった、不思議な魅力の持ち主だったのです。

私は、高校時代はあまり勉強は得意な方ではなかったのですが、私の周りには、いつも勉強に関しては同じような者ばかりが集まっていたのですが、“みのる”も勉強はあまりしなかったと記憶しています。学校の帰り、仲間でボウリングをよくやったのですが、“みのる”はボウリングが得意で、常に180点くらいでした。そのころは髪の毛を肩までのばすのがはやっていて、もちろん私も“みのる”もそうでした。“みのる”は小柄でやせていたにもかかわらず、私の仲間うちでは一番女子生徒にもてていたような気がします。

格別特徴もなく、別に容姿もカッコよかったわけでもないのに、女子生徒にもてたり、男子の中でも、何かやろうとするたびに「みのる、みのる」というような人気があったのはなぜでしょうか。高校生の頃にはわからなかったのですが、今考えると、“みのる”は何をやるにも一生懸命だったような気がします。それも、周りに対して自分のいいところばかりを見せようとするのではなく、欠点があればそれをあけっぴろげ(アケッピロゲ：心につつまかくすことがない様子)にして、かくそうとしないところが、つきあっている者に対して安心感をあたえたのだと思っています。“みのる”は、私と同じく2年浪人したのち東京の大学に入学し、東京で働いているそうです。

3年生は、いよいよ受検に向けての本番となります。なかには、まさしく極限(キョクゲン：限界ギリギリという意味)の状態で勉強している人もいるかもしれません。そして、人間の本性(ホンショウ：生まれつきの性質)が出るものです。そんな時にこそ、人間は鍛えられていくのだと思います。3年生にとって、今までは気にも留めなかった友人や周囲のクラスメイトの言動でイライラするかもしれません。周囲は、それまでと同じようにやっているのに、なんで面白くないような顔をしているのか、あるいはイライラした態度なのか訳がわからないといった場面があるかもしれません。しかし、誰もが“みのる”のように、気取る(キドル：それらしく見せること)ことなく、変にカッコつけないで真剣に一生懸命やることで、乗り越えられると思います。3年生だけでなく、「2年生に向かって」や立志式に取り組んでいる1・2年生も同様です。大変な場面だからこそ、思いやりを持って振る舞うことで、それがいつの間にか自分のもの(性格)になっていくのです。受検という正念場(ショウネンバ：その人が真価を発揮する重要な場面)を迎える3年生、進級へのハードルに挑む1・2年生と、それぞれ「チーム小中野」としての活動で、さらに一回り自分自身を成長させてください。

